特 241
586

資料第四二號
昭和十七年五月

# 西ニウギニア探檢年表

財團法人 南洋經濟研究所

始

特241
586

# 西ニウギニア探検年表

南洋經濟研究所編

## はしがき

本資料は曾て當研究所刊行「研究資料」昭和十三年十二月號に掲載したるものの復版なり。當時蘭領及英領に分ちて連載の豫定なりしが都合に依り蘭領ニウギニアのみにて中止されたり。取敢ず西部のみを上梓し他日東部をも增補せんとす。

昭和十七年五月一日

# 譯序

以下譯出した年表はクレインの「ニウギニア」に資料を求めたものであるが、原著には蘭領とパプアと東北ニウギニアとの三に大別し更に之を時期によつて細分して居るのを、譯者は全體を單に蘭領と濠洲領(東北ニウギニアを含む)の二つに分けここには蘭領の部のみを掲ぐ。

尙ほ原著には數多の參考書の外に各探檢の報告並に地圖を文獻目錄として掲げてあるが此方面に特殊の興味を有する人士には多大の參考とならう。本編では煩を省く爲此等は一切略することにした。

なほ譯者の手許には只今原著はなく譯者のノートに據つたのであるから人名などには或は幾分の誤りがあるやも計られずと心配して居る。御諒察を乞ふ。

(年表に現はれて居る地名に付ては本研究所發行の「ニウギニア詳密大地圖」及び「ニウギニア地名集成」を參照せられたし)

昭和十三年

| 西暦 | 摘要 |
| --- | --- |
| 一五四五 | ◎西班牙人 Inigo Ortiz de Retes 初めてニウギニアの北岸に上陸し西班牙國王の名に於て本島を占領す。島名を Nueva Ouinea (=New Guinea) と命名。 |
| 一六二三 | ◎蘭人カルステンス本島の南方海上より中央山脈中に雪山を望見す。 |
| 一七七五 | ◎英人トマス・フォレスト北岸ドレ灣 (Doré) に上陸。 |
| 一七九三 | ◎英人ヘイス Duke of Clarence 號にてドレ灣に來り城砦を築く。 |
| 一七九四 | ◎ヘイス宣言して曰く、「英國人は New Albion (ニウギニア) の Restoration Bay に Fort Coronation を建てたり」と。 |
| 一七九五 | ◎英人ドレ灣より撤退す。 |
| 一八二八 | ◎蘭人は南岸トリトン灣 (Triton) ロボ (Lobo) に城砦 Fort de Bús を建造す。 |
| 一八三五 | ◎和蘭海軍コール中尉は汽艇ポスチロン號を以てプリンセス・マリアナ海峽 (Prinses Marianne) を通過す。 |
| 一八三六 | ◎前記ド・ビュス城砦を放棄す。 |

一八五五　◎ドレ灣に獨逸ゴスネル傳道教會設立、此は後年に至つて和蘭ユトレヒト教會に引繼がれた。

一八五八　◎エトナ探檢隊は南岸アルグニ灣（Argoeni）及びラカヒア灣（Lakahia）地方を探檢。

◎グース理事官は科學的探檢の途中エトナ灣（Etna）を發見す。更に北岸に轉じフムボルト灣（Humboldt）を訪れ、其南西の山よりセンタニ湖（Sentani）を望む。

◎獨逸布教師ガイスレル及びオットーは北西岸フォーヘルコップのアンバーバーケン（Amberbaken）地方を訪ふ。

一八六一　◎英人アルフレッド・ワラスの助手アラン Sorong より奥地に入る。

一八七一　◎理事官ファン・デル・クラプはドレ灣アンダイ河（Andai）地方沿岸を航す。

一八七二　◎伊太利のダルベルチスはアンダイより内地に入りアルファク山脈のハッタム（Hattam）に至る。



一八七三　◎マイヤー博士はヘールフィンク灣（Geelvink）とビントニ灣（Bintoeni）との間の地峡を踏破す。但し此は疑はしいとの說もある。）

◎墺太利商船々長レドリヒ西部カラブラ川（Karabra）の溯航を試む。

一八七四　◎ロシア探檢家マクレー博士カマカ・ワラー湖（Kamaka-Waller）を發見、カマカ山に登る（一、二〇〇米）

一八七五　◎伊太利人ベッカリはソロンよりワイ・サムソン（Wai Samson）を發見、アルファク山脈を登攀してハッタムに至る（二、〇四〇米）

◎ガチェレ探檢隊フォン・シュライニッツはオニン半島（Onin）の西部セカール（Sekar）パチピ（Patipi）灣及びマック・クリューア灣（Mac Cluer）を探檢す。

一八七七　◎佛國のラグレーズはフォーヘルコップの北岸にてカローン族（Karoon）其他の土族を研究す。

一八八三　◎理事官ブラーム・モリスはマンベラモ河（Mamberamo）の東側支流を溯航す。

一八八四　◎モリス理事官は海軍中尉ケルクホーフェンと共にハビク號にてマンベラモ河

を溯りハビク島（Havik）に至る（第一回溯航）

一八九二　◎英人ドハーチはセンタニ湖探檢。

一八九八　◎マノクワリ（Manokwari）及びファク・ファクに（Fak Fak）和蘭行政官吏を駐在せしむ。

一九〇〇　◎ド・フロート船長は汽船カンフュース號を以てマンベラモ河を溯りハビク島に到る。更に上流を溯らんとして不成功に了る（第二回溯航）

◎セレット海軍中尉はッグリ族膺懲の爲クンベ川（Koembe）及びメラウケ川（Mernuke）を溯る。

一九〇一　◎コーニンク海軍中尉は北岸タミ川（Tami）を探檢オイナケに到る。

◎チクロープ山脈（Cycloop）を攀ぢ一、八九〇米の地點に達す。

◎行政上西部ニウギニアを二郡に分つ。

◎ブルストは軍艦ャーファ（Java）に搭乘メラウケ川を溯ること六〇浬、更に汽艇を以て河口より一五〇浬の地點に至り、支流ワングー川（Wangsoe）に依



つて英領國境に達す。

◎郡長モーレンブルヒはヘールフィンク灣とビンッニ灣との間の地峽を探檢す。

一九〇二　◎南部ニウギニアをタルナラ州（Ternate）より分離す。

◎郡長ファン・ヒレはベラウ地方（Berauoe）及びアルグニ灣を探檢。

◎デューマはブールー岬（Boeroe）地方を探檢す。

◎軍艦ャーファ、マック・クリューア灣を廻航す。

◎副理事官クルーセン、汽船ファン・ドールン號を以てメラウケ川を三〇粁溯航す。

一九〇二—一九〇三　◎ファン・ディーセルはオニン半島を探檢。

◎トリューブ學術探檢隊組織せらる、參加者ウォクマン博士外四名、主としてヘールフォンク灣及び他の北岸諸地方の探檢、卽ち

一、ヘールフォンク灣西岸シャリよりホルナの西ワシアン川（Wasian）に達

す。目的石炭の探鑛。

二、北岸センタニ湖の外マタレル灣（Materer）トアリム（Tearim）カプチアウ（Kaptiau）モアイフ（Moaif）諸川を溯る。

三、ヤムール湖（Jamoer）を經て北岸より地峽を横斷す。

◎クルーセン左の巡邏探檢をなす。

一、メラウケよりオンガリ（Ongari）に至る海岸地方。

二、汽船ロンボック號を以てビアン川（Bian）溯航。

三、汽艇を以てクンベ川を一六五浬溯航。

四、汽船ファン・ドールン號を以てメラウケ川を溯りワングー川に至る。

五、ワンメ（Wamme）より一五粁を去るコンド・アニム（Kondo Anim）地方。

六、政府所屬の汽船ファン・ドールン號を以てディグール河（Digoel）第一回溯航。

七、汽艇を以てミミカ川（Mimika）を一五浬溯る。



一九〇三—五　◎副理事官代理ファン・ヒレはフォーヘルコップ地方及び頸部地峽を探檢す。

一九〇四　◎クルーセン汽艇を以て南岸セタクワ川（Setakwa）を探り、更にカステール河（Kasteel）を四六浬溯る。

一九〇四—五　◎和蘭地理學會より派遣の南西ニウギニア探檢隊（マイヤス外四名）はエトナ灣のキルル（Kiroeroe）より内地に入り海拔二、〇一七及二、三〇〇米の地點に達す。

一九〇四　◎クルーセン汽艇を以てブラカ川を五〇浬溯航。

◎政府汽船ファルク號船長ファンヘルウェルデンは東灣（オースト・バーイ）からカルステンス山の東に新雪山ウィルヘルミナ山（Wilhelmina）を發見す。

◎クルーセンはファルク號を以てローレンツ河（Lorentz）及びウッンベ川（Oetoembe）を溯る。

◎ファン・オースターセーはアンギ湖（Anggi）を發見す。ヘールフィンク灣西岸のシャリより出發し此湖（東西の兩湖）に至り歸路はワリアップ（Wariap）

へ下る。

一九〇五 ◎汽船會社支配人ロイスはフォーヘルコップのケバール地方（Kebar）探檢。

◎クルーセン及マイヤスは汽船ファルクを以てディグール河第二回溯航を試み、河口より五四〇粁（直線距離二二〇粁）の地點に達す。

◎聖心派加特力教會の布教所メラウケに設けらる。

一九〇六 ◎副理事官ヘルウヰヒはメラウケよりコンド及びワンメを經て英領國境に達す。

◎ヘルウヰヒはクンベ地方を巡邏。

◎ヘルウヰヒ政府汽船ファルク號にてヤール川（Jar）を初めて溯航。又ウッンベ川を三〇浬溯る。

◎ヘルウヰヒはウッンベ川を再び溯航、次いでローレンッ川を探檢南緯4°52′東經138°44′の地點に達し、中央山脈の雪山に至る通路を發見。

◎ローヤル・ダッチ石油會社派遣のヒルシュ博士一行はビンッニ灣よりアルグニ灣へ、ワンメル（Wammer）よりヤカチ川（Jakati）に沿ひ、カルワンギ



（Karoewangi）に至る地域探檢。

◎陸軍大尉H・コレイン氏は政府汽船ブラック號を以てマンベラモ河をハビック島まで溯る、上流の溯航は急湍の爲不能。

一九〇七年以後一九一四年までの數年間はコレイン大尉の建言に基き陸海軍の組織的探檢頗る進捗し、其回數も漸次多きを加へたるを以て、南部、西部、北部ニウギニアの三地域に分ち記述するを便利と考へる。

## 南部蘭領ニウギニア地方

一九〇七 ◎ヘルウヰヒはヘルウヰヒ川（Hellwig）を四一浬探檢又ミミカ川を溯航す。

◎ゴーセン大尉はマリアナ海島とビアン川との地方探檢。

◎ローレンッの率ゆる探檢隊はローレンッ河に沿ひ雪山を目指して內地に突入

一九〇八　しへルウヒ山脈の中腹に達す（第一回南ニウギニア探檢）

◎ゴーセン大尉ローレンツ河流域を踏査、ヘルウヒ副理事官及びゴーセン大尉はカステール川及びブルーメン川（Bloemen）を探檢す。

一九〇九　◎ウェーバー大尉ピアン川より東、國境に至る地域を探る。

◎ウェーバー大尉はディグール河流域の大部分及び支流を探檢、雪山ユリアナ山頂（Juliana）を初めて望見す。

一九〇九—一〇　◎ローレンツ第二回南ニウギニア探檢隊は初めてウヒルヘルミナ山の雪線に達す。

一九一〇　◎ファン・デル・ビー中尉はフレデリク・ヘンドリク島の東半部を探檢。

◎ファン・デル・フェン中尉は興味あるウヒルデマン川及びフリンドスハップス川（共にエイランデン河の支流）を探檢。

◎セーフェル大尉はエイランデン河を地圖に記入、支流コルフ川（Kolff）を以て中央山脈に達する入口と選定す。ゴリアス山（Goliath 三、三四〇米）の中



腹二、七〇〇米の地點に達す。

一九一〇—一一　◎ファン・デル・ビー中尉はセタクワ川及びオタクワ川（Otakwa）の流域を中央山脈近くまで探檢。

◎英國の南ニウギニア第一回探檢隊はカルステンス山頂を極める目的を以て敢行されたが成功せず、ミミカ川及びカムラ川（Kamora）の源を極め矮小の蠻族を發見。

一九一一　◎陸軍大尉スヘーファー及び海軍中尉ファン・デル・フェンは共混合部隊を以てゴリアト山頂約三、三四〇米に達す。

◎ファン・デル・ビー中尉カンポン川（Kampong）探檢。

◎ガスバー軍曹はコルフ川より陸路ブラザ川（Brazza）に達す。

◎コック・ダルマンビーユ大尉一行はエイランデン河の支流モヅラ（Modoera）及びスチーンボーム川（Steenboom）より陸路本流に達し、更にブラザ、ブリンドスハップ及びアンナの支流を探檢。

一九一二

◎コック・ダルマンビーユ大尉はヨハネス・ケイツ山（Johannes Keyts）山の二、二一〇米の地點に達す。同行のアンドレ中尉はアンドレ川（Andrae）に溺る。

◎フイユトー中尉はノールト・ウェスト川（Noord-West）を探檢し、コック・ダルマンビーユ川（Le Cocq d' Armandville）の上流を發見す。

◎コック・ダルマンビーユ大尉は同名の川を河口より約六〇浬溯航。

◎ワイエルマン大尉はノールド・ウェスト川を溯り海拔一、〇五〇米の地點に達し、夫れよりブルーメン川及びカステール川を探檢。

◎フイユトー中尉はノールド・ウェスト川に沿ひ、ネーフェル山脈（Nevel）中の二、七二〇米の高地に達す。

◎ワイエルマン大尉はブルーメン川を溯り高度一、〇〇〇米の地點に達す。

◎シャイレ中尉はチェマラ川（Tjemara 西カステール川の上流）を探檢。

◎ワイエルマン大尉はブルーメン川より陸路コック・ダルマンビーユ川に向ふ。

◎ワイエルマン大尉はアキメガ、セタクワ其他の諸川探檢。



一九一二—三

◎フイユトー中尉はコック・ダルマンビーユ川の上流地域を徒歩にて探檢。

◎ウォラストンの率ゆる英國の南ニウギニア第二回探檢隊は遂にカルステンス山の雪線に達す。但し山頂までなほ約四〇〇米を餘し斷崖にして登るを得ず。

一九一三

◎ヘルブ大尉南岸のラカヒア灣（Lakahia）よりミミカに至る海岸を探る。

◎イルゲン中尉はオタクワ川よりカムラ灣に至る間の網の目の樣なクリークを縱橫に探檢す。

◎西ニウギニア探檢隊の一分隊は北岸ワンダンメン灣（Wandammen）及びウマール灣（Oemar）より南岸ウラマ川（Oerama 一名 Omba 川）に達す。

## 西部蘭領ニウギニア

一九〇七

◎フォーヘル中尉はオニン半島及びバハム地方（Baham）踏査。

◎チスメーア中尉はソロンより北岸ドレフム灣（Doréhoem）に到る。

一九〇八　◎ボンベライ半島（Bomberai）のブヂヂ川（Bedidi）地方探檢。
◎カムラウ（Kamrau）灣よりグーンス灣（Rijklof van Goens）ヘ半島の南部横斷。
一九〇九　◎チスメーア中尉アルグニ灣より北方カイテロ川（Kaitero）踏破。
◎チスメーア中尉フォーヘルコップ南岸のマンタマニ川（Mentamani）及びカイス川（Kais）を探檢。
一九一〇　◎コッホ大尉はエトナ灣の南オンバ川（一名ウラマ川）を探檢。
◎チスメーア中尉は南岸ビチャラ灣（Bitsjara）よりアルグニ灣に入る。
◎チスメーア中尉カムラウ灣のブロアイ川（Beroai）よりボンベライ半島を横ぎり北ビンツニ灣に注ぐカスリ川（Kasseri）河口に出るに成功す。
◎コッホ大尉ファン・グーンス灣よりボンベライ半島を横ぎり北岸ブヂヂ川に達す。
◎チスメーア中尉は南岸ビチャル灣よりエトナ灣に至る地域を探檢、カマカ湖及びムブタ湖を訪ふ。



一九一一　◎コッホ大尉アルグニ灣よりビツニ灣のカスリ川を探檢。
◎コッホ大尉三度びアルグニ灣よりビツニ灣を經てヘールフォンク灣のワンダメンに達す。
◎ファン・デル・プルーフ中尉南岸エトナ灣とトリトン灣との間の地域を探檢。
◎ファン・デル・プルーフ中尉トリトン灣よりワンダメン灣へニウギニアの頸部を横斷す。
◎ファン・デル・プルーフ中尉はビツニ灣の北岸ワシアン川より北岸アンギ西湖に沿ふてドレ灣に達す。
◎コッホ大尉フォーヘルコップの南岸ワロンゲ川より北アマルー湖に沿ひ北岸ウェサン川迄横斷に成功。
◎コッホ大尉はフォーヘルコップ南岸セカク川より陸路東方に向ひラワレ川の上流よりセブヤル川に達す。
◎ファン・デル・プルーフ中尉フォーヘルコップ最廣部の横斷に成功す。其順路は

北岸ワルバペリよりバルナを經て南岸セブヤル川河口に出でた。

一九一一—一二　◎ファン・デル・プルーフ中尉セブヤル川よりワシアン川を探檢。

一九一二　◎ヘルプ大尉北岸カイロニ（Kaironi）よりアンギ湖に沿ひ東岸オランス灣（Orans）に達す。

◎ミューラー中尉は南岸カイブス河口（Kaiboes）よりアマルー湖に沿ひ北西岸のソロンに達し、フォーヘルコップの西部を横斷す。

◎ヘルプ大尉及びミューラー中尉は南岸より出發、フォーヘルコップの中部地帶探檢、卽ちカムンダン川（Kamoendan）を溯りファーン（Faan）ファウマイ（Faumai）の諸山を踏破しウィリアガール川（Wiriagar）を下る。

一九一三　◎ミューラー中尉ビンツニ灣のワシアン川よりフォーヘルコップ中部のホルナに達す。

◎ヘルプ大尉ワシアン川附近探檢。

◎イルゲン中尉は北岸アスバケン（Asbaken）よりケラグー（Kelagoe）及びセレ



ムック川（Seremoek）を經て南岸に達す。

◎ヘルプ大尉北岸アスバケンよりワイサムソン川及びワサミ川（Wasami）を經て北岸ワルバペリ（Warpaperi）に達す。

◎クレーマー海軍中尉はフォーヘルコップの南東部ムッリ川（Moetoeri）附近探檢。

## 北部蘭領ニウギニア

一九〇九　◎サクセ大尉タミ川を溯つてセコフロ（Sekofro）探檢。

◎ランボネット海軍中尉はピオーニア號を以てマンベラモ河を溯航し、マリーン急湍（Marine-vallen）を突破しエディ急湍（Edi-vallen）に至る。

一九〇九—一〇　◎ヘルデルセー大尉の一隊はマンベラモを溯り大沼澤地（Meervlakte）を發見、更に上流ファン・ダーレン川（Van Daalen）を溯る。

一九一〇

◎サクセ大尉獨領との國境モッコ・フィアング山脈（Mokko-Fiang）を越えてケーロム川（Kcerom）を發見、歸路は獨領ベワニ川（Bewani）を下る。

◎蘭獨國境探檢探ロイメス海軍中尉の一行はサクセ大尉と共にモッコ・フィアング山脈を越え、ケーロム川を下りターミヌス（Terminus）に達す。

一九一〇—一一

◎セーファー中尉センタニ湖、チクローブ山、コリメ川及びセカント川を探檢。

◎獨逸のマックス・モスコウスキ博士はマンベラモの支流ウェーア川（Weir）を探檢。更にマンベラモを溯つて中央山脈に沿ひファン・ダーレン川を極む。

一九一一

◎セーファー中尉セルモワイ川（Sermowai）を探檢。

◎セーファー中尉コリメ川探檢。

◎サクセ大尉一行はモアイフ川、ピルワイ川（Piloewai）及びビリ川を探檢。

◎クロースタ其他はチクローブ山脈中の最高峰シナコブ（Sinakob）に登る。其よりアルソー（Arso）地方を經てケーロム川探檢。

◎ビンネンヂク中尉はビリ川を溯りフォヤ山脈の高峰二、〇五〇米の地點に達す。



一九一二

◎クロースタ大尉トール川流域の地圖を作成。

◎クロースタ大尉フルカム川（Verkam）探檢。

◎ワル海軍中尉はマンベラモの大支流イデンブルヒ川を探檢。

◎クロースタ大尉ヘールフォンク灣東岸ワポンガ川（Waponggn）を溯る。

◎ビンネンヂク中尉ワレナイ川（Warenai）を探檢。

◎クロースタ大尉レガレ川（Legaré）及びシリヲ川（Siriwo）探檢。

◎クロースタ大尉はヘールフォンク灣南岸のブミ川（Boemi）スロ川(?)を溯りウエーランド山脈（Weyland）に達しジャビ族を訪ふ。

◎ビンネンヂクはワンガル川（Wanggar）の流域を探檢し、ヂャラウ川（Djalau）を經てヤムール湖の平原に出でワンマ川（Wamma）を下る。

◎ビンネンヂクはワンガル川を溯り二、二〇〇米の高地を探る。

一九一三

◎クロースタ大尉アルスワール川(?)よりアパウワール川（Apauwar）を經てワイムワールを探檢。

◎クロースタはベトワ川を溯りアバウワーの支流たるボワリ川よりウォスケ川に出づ。
◎ビンネンヂク中尉ワイムワールよりアバウワールの下流に到る。
◎ビンネンヂクはストルーフェ及びドールマン兩海軍中尉と共にワンガール川を溯りウエーランド山脈中の三、七二〇米の地點に達す。
◎クロースタはナビレ（Nabire）よりウエーランド山脈中の三、二四〇米の地點に達す。
◎クロースタはドールマン及びストルーフェと共にワローペン海岸（Waropen）よりマンベラモ河口に至る諸河川を探檢す。
◎シュルツ大尉北岸ボンゴ地方（Bonggo）及びワレムゲ地方（?）探檢。
◎ストルーフェ中尉バラパシ川（Barapasi）及びルワイ川（?）を溯りファン・レース山脈の西部一、〇〇〇米の地點に至る。
（マンベラモ流域の探檢）





◎オッバーマン大尉マンベラモ川よりアバウワールに出づ。
◎ランヘラー海軍中尉マンベラモの下流よりロンベバイ湖（Rombebai）を探檢。
◎オッバーマンはマンベラモ東岸ピオニアー・ビバック（Pioniers Bivak）附近探檢。
◎シュルツ大尉マンベラモの西ファン・レース山脈をファン・ヘルダー川（Van Gelder）に沿ふて探檢。
◎ストルフェはルーフェール川を溯る。
◎フェイエトー中尉はイデンブルク川を溯りカヌー・ビバック（Canoe-Bivak）に至る。
◎オッバーマン一行はイデンブルク川の上流地方を極めプーフェー（Poeveh）パウワシ川（Pauwassi）を經てケーロム川に達す。
◎フェイエトー中尉第三回探檢、イデンブルク川より北岸セルモワイ川に出づ。
◎ストルーフェ及びイルゲン兩中尉はルーフェール川の上流よりワイボガ川を下りヘールフォンク灣に出づ。ストルーフェ土人に殺害さる。

◎シュルツ大尉並にドールマン海軍中尉ルーフェール川の上流を探檢し、二、六五〇米の高地に達し、南カルスランス山及びイデンブルク山の雪を望見す。

◎ドールマンはルフェール川とファン・ダーレン川との間の地域を探檢。

◎ランヘラー海軍中尉ソブゲル川（Sobger イデンブルク川の支流）を探檢す。

◎インゲン中尉イデンブルク川の左岸に近き一、二四〇米の地點に登る。

◎ドールマン海軍中尉はイデンブルク川左岸支流（其後ドールマン川と命名せらる）を溯り三、五八〇米の高峰を極む。（ドールマン・トップ）山頂より遙に南ウキルヘルミナ山の雪を望む。

一九一七　世界大戰中及び其後の探檢（地域によりて區別せず）

一九一八　◎ホーヘンラート一行は北岸ビリ川の流域に地質調査をなす。

◎鑛山局ケンマリンク博士はビリ川平原、トール河流域幅四十粁に亘る地域並に西バーナム川に至る地域踏査。

◎フォーヘルコップ地方にてはマノクワリより南ウンデシ（Windesi）に至る地



域、マノクワリより西方アンバーバーケンの奥地に至る一二〇粁の地域、更にヘールフォンク灣よりアンギ湖を經て南西ホルナに至る區域を探査す。

一九二〇—二一　◎鑛山局スキールサイキ博士フォーヘルコップ半島の南部及西部の調査を了り、次いで北ニウギニアの東方に移りデムタ（Demta）とセンタニ湖との間、特にセルモワイ川の南方を踏査。

一九二〇　◎バウト技師はヘールフォンク灣よりヤムル湖探檢。

◎此年ニウギニアは一つの州（residentie）となし有名なるルロフス氏理事官となる。メラウケ川の上流、ディグール川の各部落に行政官を派す。

一九二〇—二一　◎オーファレム一行の學術探檢隊はマンベラモを溯つて北より中央山脈に向ふ。ドールマン山を過ぎて渓谷に下ると矮小の土族、人口稠密な部落を發見、此地をスワルト・ダル（Swart Dal）と命名。

◎同探檢隊の一部クレーマー陸軍中佐の率ゆる別働隊はウキルヘルミナ山に向ひ北側より初めて山頂を極む。

443
82

一九二三 ◎ラツメーチンはヘールフォンク灣東岸のナウ（Nsia）島より出發ウローペンの奥地にタルンガン及びコベ族を訪ふ。

◎更にニサ湖（Nsia）に出でファン・レース山脈を東に越えてセサバク川よりマンベラモ河に出づ。

一九二六 ◎ディグール上流のタナ・メラに政廳出張所（後に流刑者收容所）の設置。

◎ファン・レユーウェン博士と米國スターリング教授との蘭米共同學術探檢はルーフェール上流の地域を探檢初めて飛行探檢を試む。

一九三二—三三 ◎ウェントホルトの地質調査、センタニ湖、フォーヘルコップ半島のマノクワリ、アンギ湖、ソロン、ワイサムソン及びアンバーバーケン地方。

一九三四 ◎ベリーゲル及びベルドラーヘルはワローペン地方及びニサ湖探檢。

（終）



昭和十八年九月廿七日印刷
昭和十八年九月三十日發行

綱墓象 發行人 小西千比古
東京都芝區愛宕町二ノ一四

印刷者 谷本正
東京都芝區愛宕町二ノ一四

印刷所 愛宕印刷株式會社
東京都芝區愛宕町二ノ一四（東東一二五）

發行所 財團法人 南洋經濟研究所出版部
東京都赤坂區表町四丁目一番地
振替貯金口座東京一四五、八二二番

價格 壹參拾錢
特別行爲稅相當額 六錢
賣價 三十六錢
郵稅四錢

終